

# 第 3 章

---

## 難病に対する中国医学の効果

—— N 氏の症例を考える

本章では現代の中国医学とはいったいどのようなものなのか、実際の治療例を示しながらご紹介していきます。中国医学特有の診断法や治療法が西洋医学あるいは日本漢方とどのように異なるのか、またその治療効果はどのようにあらわれるのか、症例に触れることでご理解いただけたと思います。

ご紹介する症例は、筋肉の難治性疾患の患者です。仮にN氏と称しましょう。

N氏の病気は、西洋医学治療の効果が期待できない三つのケースの中で（序章参照）、最も重篤なケース二の難病に相当します。ここでケース一の「不定愁訴」の患者やケース三の「未病」を取り上げなかったのは、中日友好病院にこのような患者がいないためではありません。事実、中国医学部門の外来や病棟には、このような患者は大勢います。難病の例を取り上げた理由は、中国医学の優れた治療効果を最も端的に示すことができると思ったからです。

N氏はわたしにとって生涯忘れ得ない患者さんです。中国医学治療によりN氏の症状が改善するのを目の当たりにして、初めて中国医学には西洋医学ではなし得ない優れた治療効果があることを実感したからです。そして中国医学は科学的に研究する価値がある新し

い分野の医学であると確信したのです。

N氏に出会うまでは、近代西洋医学こそ病気を治療する最良の手段と信じて疑いませんでした。

わたしはN氏の病気が少しでも良くなって欲しいと願うとともに、

「このような難病が中国医学でホントに良くなるのか？」

という懐疑的と言ってもよい目で治療経過を見ていたのです。中国医学に対する思い入れなどが入る余地は全くありませんでした。

本章は医学論文ではありませんが、「症例報告」の形式を真似て、できるだけ詳細かつ客観的にN氏の診断と治療の経過を記述していきます。症例報告は、多数の症例を統計解析の手法で検討する論文とは異なり、一例あるいは数例の症例について検討した論文ですが、学術的な意味は決して小さくありません。新しい治療法の発見が一例の症例報告からはじまることは、近代西洋医学では何も珍しいことではないからです。

## N氏の病歴

N氏は四十五歳の男性で、二〇〇〇年九月上旬に車椅子に乗って来院しました。日本の

某病院で「封入<sup>ふうにゅうたいきんえん</sup>体筋炎」という稀な筋肉の難病の診断名がつけられていました。発病から既に二十年近く経っていました。

西洋医学治療の効果のない難病にかかった患者がどのような経過をたどるのか、少し長くなりますが、N氏の足跡を発病から入院まで追ってみましょう。

N氏は大学卒業後、地元の会社に技術者として勤めはじめました。仕事にも慣れ、充実した社会人としての生活を送っていましたが、二十八歳の時に大きな転機が訪れました。歩く時に腰がふらつくためか、同僚に歩く姿勢がおかしいと言われたのです。半年後には、階段をのぼるのに次第に時間がかかるようになっていきました。N氏は体力の低下によるものと思い、ランニングなどのトレーニングに励むようになりました。ところが症状はさらに進行していき、一年後には、走ることができなくなりました。さすがにこの頃になると病気ではないかと心配になり、某大学の神経内科を受診しました。二週間の検査入院の後、医師から告げられた病名は、「脊髄性進行性筋萎縮症」というものでした。N氏は進行性<sup>しんこうせい</sup>という名のついた病名を聞かされ、自身の将来に対する不安におののいたと、と振り返ります。

この病気は脊髄の運動神経の変性疾患ですが、今のところ有効な西洋医学的治療法はあ

りません。このような神経疾患でよく処方されるのがビタミンB<sup>12</sup>です。障害された神経が回復するのに効果が有ると言われていますが、特效薬という訳ではありません。N氏もビタミンB<sup>12</sup>の投与を受けながら、週に三回のリハビリを続けることになりました。しかし、症状はさらに進行し、三十一歳の時には装具をつけないと歩行できなくなりました。N氏は、医者のおり治療を続けても、症状がどんどん悪くなるため不安がつていきました。そして、別の病院を受診することを決意したのです。

再検査の結果、神経ではなく筋肉の病気であることが告げられました。封入体筋炎という筋肉疾患の中でもかなり稀な病気です。神経や筋肉の難治性疾患では、発病の早い段階では診断が確定しないことも稀ではありません。副腎ステロイドホルモンのパルス療法（大量を短期的に投与する治療法）が有効かもしれないということで、六ヶ月間にわたり入院治療を行うことになりました。治療直後は、つま先が動かせるようになり、若干の筋力が戻った時期もありました。この時、N氏は発病して以来、はじめて希望を感じたと言います。しかしその後は再び筋力が戻ることもなく、ステロイド療法の副作用である鬱症<sup>うつ</sup>状に苦しむことになったのです。

ほとんど治療効果がないままに退院しましたが、それでも最後の望みの綱であるステロイドホルモンを飲み続けました。しかし筋肉の麻痺はゆっくりと確実に進行していき、四

十歳時には自力では歩けなくなり、車椅子が必要となりました。さらに筋肉の障害は上肢にもおよび、四十二歳時にはついに自宅で寝たきりとなったのです。そして、N氏は西洋医学的治療の効果はもう期待できないことを悟り、自らステロイド療法を含めすべての治療を中止したのです。

西洋医学主体の現代社会において、もし西洋医学では治療できない難病にかかった場合、いかに悲惨な経過をたどるのかお分かり頂けたと思います。そして忘れてはいけないのは、このように西洋医学の網の目からこぼれ落ちてしまう難病患者は決して少なくないということです。

さて、わたしはN氏に初めて会った時、意外な言葉を聞くことになりました。

「中国医学にはそんなに期待してません。」

中国にやって来たのは、N氏の介護を行っている老母の負担を一時的にでも軽減させたかったからなのです。中国医学に対しては、どのようなものか一度試してみたいという程度で、長い間動かなかった手足が動くようになるとは期待していない、と言われたのです。

このことはN氏に対する中国医学の治療効果を考える上で重要なことです。なぜならば、治療効果というものは患者の精神状態に左右されることがよくあるからです。この薬は効

果があると信じて飲むと、たとえ薬理作用のない偽薬——「プラシーボ」と称します——であっても症状が改善する場合があります。

たとえば脳代謝賦活剤ふかざいは、脳の代謝を亢進させ痴呆症などに効果があると言われている。ところが、偽薬も脳代謝賦活剤と同じ程度の効果があることが分かり、発売中止になったのです。このように薬というのは、単に症状が良くなるだけでは、その臨床的効果があるとは結論できないのです。

N氏は中国医学にさしたる期待も抱かずに治療をはじめたわけですが、次項ではどのように診断されたのか見ていきましょう。

### 中国医学ではどう診断されたか

まず西洋医学的な所見は次のとおりです。

体格は、身長一八六cm、体重六五kgと、大柄ですがやせ気味でした。全身の筋肉の萎縮が目立ち、四肢の筋肉だけでなく背筋などの体幹筋も萎縮していました。血圧は低く、最高血圧は九〇mmHgでした。

感覚機能は正常でしたが、運動機能はかなり障害されていました。下肢は軽度の伸展運

動（足を伸ばす運動）ができるだけで、歩行はおろか一人で立つこともできません。上肢の筋力も低下しており、車椅子を自分で動かすことはできません。また背筋や頸部筋の筋力も著しく低下していました。このため、一旦上体を屈めてしまうと自分では元に戻すことができません。さらに寝返りもうてません。

このようにN氏は食事や排便など、日常活動のほぼ全ての介護が必要な状態でした。ただ、手の運動機能はある程度保たれており、自分でパソコンのキーボードを使うことができました。

次に中医による診察です。

中国医学には「四診」という診察法があります。

患者から症状や病歴を聴取する「問診」、その時の発声、あるいは便や尿の状態を聞いたり匂いを嗅ぐ「聞診」、舌など身体を見る「望診」（舌の望診を特に「舌診」と言います）、そして脈など身体に触れる「切診」（脈の切診を特に「脈診」と言います）の四つの診察法です。これらは西洋医学における一般的な診察法と似ていますが、舌や脈はより詳しく観察します。



N氏の四診の結果を見てみましょう。中医であるZ医師とともに行った四診のポイント  
は、次のように要約されます。

問診 ①長い病歴があること。

聞診 ②声の調子が固い、③便が軟らかい。

望診 ④顔色が青白いこと。⑤手足が冷たいこと。

舌診 ⑥舌苔が薄く、白っぽく、⑦舌質（舌の本体）は薄赤紫色をしている。

切診 ⑧皮膚が全体に乾燥していること、⑨筋肉が萎縮している。

脈診 脈は⑩細く、⑪張りがあ（弦と表現されます）。

N氏の四診の所見はこのようにまとめられますが、二つの点に注目していただきたいのです。

一つは、身体の部分的な所見を極めて詳細に観察している点です。中国医学は西洋医学と異なり、身体の部分ではなく身体全体を治療すると言われています。このことが中国医学はホリスティック医学——全体医療——と言われる所以ですが、診察では身体の部分の変化を重視しているのです。

なぜならば中国医学では、

「部分が全体を表している」

と考えるからです。

たとえば舌や脈は、五臓六腑の変化あるいは体内の気、血、水の三要素のバランスなどを反映していると考えられます。ですから部分の変化を知れば、全体の変化を知ることができるのです。実際、外来で忙しい時には、中医は話をしながら脈をとり、そして最後に舌を診ておしまいということもあります。

もう一つは、中国医学の診察が客観的であるという点です。つまり、四診のそれぞれの所見というのは、ある程度の訓練を受けた医者であれば、誰が診ても同じ所見が得られるということです。これは西洋医学では当たり前のことですが、中国医学の診察というものは主観的で曖昧なものと思っていた人は多いのではないのでしょうか。

さて四診により得られた所見から診断が下されるわけですが、中国医学の診断は西洋医学の診断とは意味あいが少し異なります。

西洋医学における診断は、疾患を特定することです。つまり診断名には病名がつけられます。

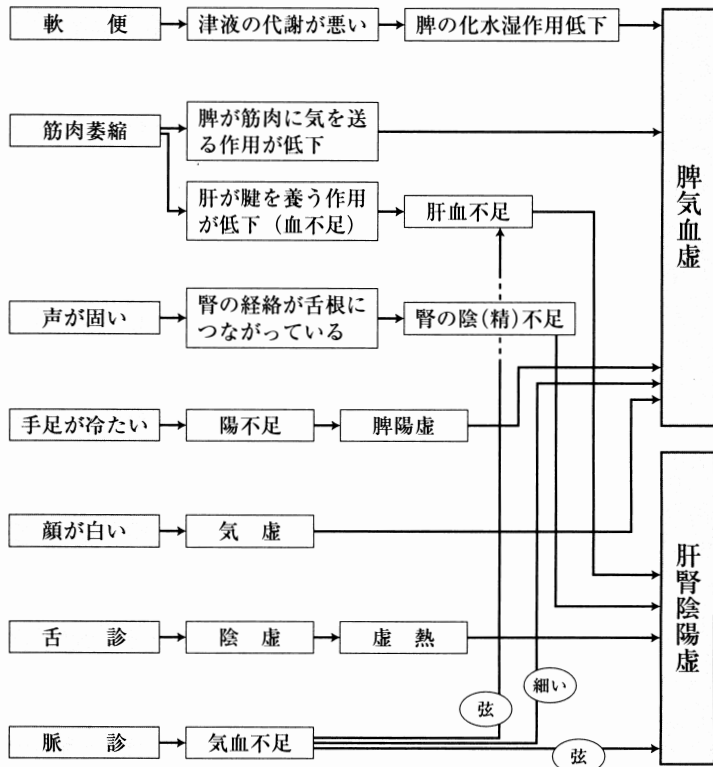
それに対して中国医学では、臓器（五臓六腑など）の機能がどのように障害されて、生

体全体の機能バランスが崩れているのかを判断することが診断なのです。これは「弁証」と呼ばれ、中国医学診断の一つの特徴になっています。西洋医学にも病気が発生する生理的メカニズムを分析する「病態生理」という分野がありますが、弁証はこれに類似したとも言えるでしょう。

N氏の弁証を見てみましょう。四診の陽性所見より導かれた弁証は、「脾氣血虚<sup>ひきけつきよ</sup>」および「肝腎陰陽虚」というものでした。この弁証の意味するところは、「脾の氣と血が不足」しており、さらに「肝と腎の陰と陽が不足」しているということです。しかし、中国医学を知らない者にとつて、日本語としては分かりませんが、意味は全く分からないのではないのでしょうか。第一、筋肉の病気なのに、なぜ脾臓や肝臓、腎臓などが関係するのか、不思議に思われるでしょう。これは中国医学における臓器の機能というものが、西洋医学的解剖にもとづいた臓器の機能と一致しないことと関係しているからです（第四章を参照）。ここでは、どのようなプロセスでこのような結論が導かれるのか、簡単に図で示してみましよう。

図四における矢印は、四診の所見から導かれる臓器の状態を示しています。この図を見ますと、中医が多くの所見をどのように考えて、臓器の状態、あるいはどの臓器が障害さ

図四〇N氏の弁証——中国医学の診断プロセス



れているかを判断していく、そのプロセスの一端を知ることができように思います。わたしは、中国医学の診断プロセスを図示するようになって、中国医学というものは科学的な医学であることに気がつきました。つまり、四診による診察法が客観的であるというだけではなく、弁証のプロセス自体も非常に論理的であるからです。ただその基礎になっている理論が、西洋医学と異なるだけです。

## 治療の実際

診断の次は治療ですが、二段階に分けることができます。

まず、「治則」と言う治療原則を決定します。弁証（診断）と治則の間には一定の法則があり、弁証が決まると自然に治則が導かれます。この法則は中国医学の基礎理論である陰陽五行学説にもとづいています。一見難解な古代哲学ですが、実は極めてシンプルな原則で成り立っているのです（第六章参照）。たとえば、何かが足りない時は、それを補う。あるいは、足りないものに拮抗する作用のあるものを減らす、などいくつかの原則にもとづいて治療するのです。

N氏の治則はどのようになるでしょうか。弁証は「脾気血虚」および「肝腎陰陽虚」で

表一〇N氏の生薬の処方内容

弁証	治則	生薬
脾気血虚	補気	党参、黄耆、茯苓、白朮
	補血	枸杞子、鶏血藤、芍薬
肝腎陰虚	補陰	熟地黄、天門冬、麦門冬
肝腎陽虚	補陽	炙附子、桂枝

した。まず、脾気血虚に対する治則ですが、脾の気と血が足りないのです、これを補います。それぞれ「補気」、「補血」と言います。次に肝腎陰陽虚ですが、肝腎の陰と陽が不足しているのです、陰と陽を補います（「補陰」、「補陽」と言います）。これらをまとめたN氏の治則は、「脾補気、補血」と「肝腎補陰、補陽」になります。いささか、拍子抜けするくらいシンプルな結論ですが、治則というのはあくまで治療の原則ではないことによりま

す。  
次に、治則に従って処方内容を検討してきます。この作業を「論治」と称しますが、中国医学では診断から治療の過程を一括して「弁証論治」と呼んでいます。

N氏の生薬の処方を見てください。表一

にその処方内容を示します。

N氏に対しては、実に十二種類もの生薬が組み合わされて、処方されているのです。そして重要なことは、各々の生薬には一定の決まった中国医学的作用があることです。

この処方を見て分かるのは、中国医学の生薬の処方というものは、理路整然とした論理にもとづいてなされていることです。弁証から論治、論治から処方、という流れの中には明確な論理が存在するのです。生薬の処方というものは、曖昧なさじ加減だけで決めているのではなく、ましてや直感と経験だけで思いつくままに決めているのではないのです。

さらにこの処方を見て思うのは、日本で行われている漢方治療は、本場中国の漢方治療——中国医学治療——とは似て非なるものではないか、いや、全くの別物ではないか、ということ。つまりこういうことです。日本で漢方薬を処方する場合、ごく一部の医師を除いて、漢方エキス剤を使用します。この漢方エキス剤というのは、〇〇湯などという既に決まった処方内容にもとづいて成分が決められています。そして、医師は漢方エキス剤の効能（西洋医学的病名あるいは症状で示されている）にもとづいて、どのエキス剤にするのか決めるのです。このように日本の漢方治療では、中国医学的治療の根幹をなしている弁証論治を行わないで、決まった処方例で治療するケースが大部分なのです。

日本では漢方薬を処方する時に、「薬がからだに合えば、効きます」という言い方をす

ることがある、と前でも書きました(実を言うと、わたしもそう言ったことがあります)。患者も漢方治療とはそういうものと思っただけか、納得してしまいます。しかし、考えてみますと、こんなに無責任な言い方もないかもしれませぬ。もし、西洋医学的治療を行っている時に、このような言い方をしたとすれば、すぐさま患者からの信頼を失うでしょう。「薬が合えば、効きます」という言い方は、中国の中医からは聞きませぬ。なぜならば、中医は弁証論治にもとづいて薬を処方するからです。

## N氏の中国医学治療の効果

このようにして、N氏は中国医学治療をはじめましたが、その治療の効果はどうだったのか、経過をたどりながら見ていきましょう。

まず治療をはじめて三日後より、足の冷感が軽減しました。N氏は夏場でも靴下を二、三枚履かないと足が冷たく感じるほどの冷え性でした。また、四診の切診でも足が冷たいことは所見の一つに入っていました。この冷感が、生薬を飲み始めて三日後より徐々に軽減し、一週間でほぼ消失したのです。

この頃、N氏は、



「以前より、からだがポカポカと温かい感じがする」と言っていました。

そして治療をはじめて二週後より便の状態が良くなりました。治療前は三日に一回ほど下痢状の便が出ていたのが、毎日普通の便が出るようになったのです。

これらは一見些細なことかもしれませんが、N氏にとっては、毎日の生活を過ごす上で大きな改善点となりました。靴下は一枚履くだけで寒さを覚えなくなり、また毎回の食事もおいしくなったのです。とかく西洋医は病気を治すことに目を奪われがちで、患者のこのような一般状態に余り気を配らない傾向があるのではないのでしょうか。わたしは自身への反省を込めてそう思うのです。

それからしばらくは、大した変化は起こりませんでした。やはり筋肉の難病では中国医学も歯が立たないのか、と思いはじめた十一月の下旬のことでした。治療をはじめて既に二ヶ月余り経っていました。

病院のコーヒーショップで顔を合わせた時に「何か変わったことはない？」と久しぶりにN氏に聞いてみたのです。その頃は、病状について何度も聞くと精神的な負担を増やすと思い、しばらく聞いていなかったのです。

N氏は少し考えた後、

「そういうえば、最近、車椅子に乗っていても、余り身体が傾かなくなってきました。」と言われたのです。

どういふことかと言いますと、背筋の筋力が弱いため、車椅子に乗っているとだんだん身体が左側に傾いてしまっていました。それが、長時間乗っていても、真直ぐに座れるようになった、と言うのです。「えっ、それホント?」と思わず、わたしは聞き返しました。なぜならば、N氏の筋力の回復は、ステロイドのパルス療法を受けた時に(三十二歳時)一時的に認められたことがある以外に、これまで全くなかったからです。

そして十二月上旬のことです。

「先生、身体を起こせるようになりました!」

と言いながら、上体を倒してテーブルに顔をつけてから、自らの力で再び上体を真直ぐに起こしてみせたのです。N氏は背筋の筋力が極端に弱いために、何かのはずみでテーブルの上に頭が倒れてしまうと、誰かに手伝ってもらわないと、身体を起こせなかったのです。ある時などは、傍に人がいないため、三十分近く顔をテーブルに押しつけたままいたことがあったそうです。それが誰の介助も受けることなく、自分で身体を起こせるようになったのです。車椅子に真直ぐ座れるようになったことを聞いた時は、本当に筋力が戻ったためなのか、何か別の要因があるのか、いささか疑問に思いましたが、今回ののは明ら

かに背筋力の回復を示している、と確信しました。

この背筋力の回復は、N氏の生活に大きな変化をもたらしました。一つは、自分で食事ができるようになったことです。これまでは、上肢の筋力が弱く右手を口まで持っていけないため、介護人に食べ物を口まで運んでもらって食べていました。それが、上体を屈めて食器の近くまで口を持っていくことにより、自分でスプーンを使って食べられるようになったのです。自分が食べたいように自由に食事をすることは、N氏の念願でした。

もう一つの生活の変化は、寝返りがうてるようになったことです。わたしたちは寝ている間に、何度も無意識に寝返りをうっていますが、もしこれができないと、背中が痛くなるばかりでなく、長時間になると血行が悪くなり床擦れができてしまいます。N氏の場合、背筋が弱いのでこの寝返りがうてなかったのです。N氏の感覚機能は全く障害されていませんので、朝になり目がさめた時の背中の痛みはかなりのものであったと想像されます。これから解放されたことは、日常生活の質（QOL）の大きな改善です。

さらに左手の握力も、ほぼ時期を同じくして回復してきました。握力計では測定できないほどの弱い握力でしたが、確かに以前よりは力が入るようになっていきます。背筋などの体幹筋だけでなく、末梢の筋肉も回復しはじめたのです。このように、治療をはじめて三ヶ月後くらいから、急速に改善傾向が見られましたが、ピザの関係により、四ヶ月で取り

あえず治療を中断しました（中国で治療を受ける場合、観光ビザで入国することになります。一回の観光ビザによる滞在期限は三ヶ月で、延長しても最長四ヶ月が限度なのです）。二〇〇一年一月初旬、来院した時と同じように、N氏は介護人に車椅子を押ししてもらいながら病院を後にしました。歩いて帰れるような奇跡は起こりませんでした。QOLの改善という大きな土産を携えて帰国したのです。

### なぜ中国医学治療が難病に効果があるのか？

前項では、筋肉の難病にかかったN氏に対する中国医学治療はどのようなものであったか、皆さんとともに見てきました。そして、これまでには見られなかった筋力の回復が得られたことが分かりました。

ここで、なぜ中国医学治療により、これまで西洋医学治療では得られなかった症状の改善が見られるのか、考えてみましょう。N氏の治療経過を振り返りながら、中国医学治療のメカニズムを探っていききたいと思います。

まず、治療をはじめてからの症状の変化を見ていきますと、大まかに前期と後期の二段

階に分けることができるように思います。治療をはじめてから比較的早い時期の変化と、二、三ヶ月経つてからの変化です。前期の段階では、全身状態が改善しました。つまり、手足が暖かくなり冷感が消失しました。それと、排便が規則正しくなり、食欲がでてきたことです。そして後期に入ってから、背筋など体幹筋の筋力が回復していききました。

一つの可能性は、全身状態の改善が筋力の回復をもたらしたことです。手足が暖かくなり冷感が消失したことは、末梢の血液循環が良くなったことを表していると思います。筋肉の血液循環も改善した、と考えて良いでしょう。また排便が規則正しくなったことから、栄養の吸収が良くなったと考えられます。このような全身状態の改善が、筋肉に豊富な酸素と栄養を送り込み、筋肉の代謝活動を高めた、その結果、筋力が回復したと考えるわけです。

N氏に対する中国医学治療の原則（論治）の一つは、気を補う「補気」でした。その治療効果から、古代の中医が「気」をどのように考えていたのか、その一端をうかがい知ることができるかもしれません。彼らは、N氏の血色が良くなり、真直ぐに座れるようになったのは、身体の中に気が補給されたからである、と考えたかもしれません。中国医学では気は物質としてとらえられていますので、このような推測も成り立つわけです（気については、第六章を参照）。

ただ、全身状態の改善が筋力の回復につながったという考え方も、中国医学治療の一面しか見ていない可能性もあります。なぜなら、栄養状態が良くなったというだけでは、皮下脂肪がつくだけでもおかしくないからです。単に太るだけで、なにも筋力がアップする必要はないのです。やはり栄養状態の改善の他に別のメカニズムを考えないと、説明できないように思います。

実は、このように考えるきっかけとなった症例が別にあるのです。その方も日本人ですが、N氏とは異なり神経の変性疾患でした。筋萎縮性側索硬化症という難病です。大リーグの往年の名選手ルー・ゲーリックがこの病に倒れたことから、ルー・ゲーリック病と一般に呼ばれることもあります。現在でも、車椅子に乗った英国の科学者のホーキンス博士がテレビや雑誌に登場することがありますが、この方も筋萎縮性側索硬化症にかかっています。

この筋萎縮性側索硬化症の日本人患者、Y氏は発病してから一年余りで、中国医学治療のために来院しました。舌の萎縮が著しくうまく喋ることができず、また食べ物をうまく飲み込むことができませんでした（嚥下障害と言います）。これらは脳幹の舌下神経（舌を動かす神経）などの脳神経の障害が原因ですが、筋萎縮性側索硬化症に特徴的なもので

す。さらにY氏は右の上肢の麻痺があり、右前腕（肘から手まで）を三〇度ぐらいしか曲げることができませんでした。

このY氏の中国医学上の弁証論治は、N氏とほぼ同じでした。中国医学では、このような神経の疾患と筋肉の疾患が類似した弁証論治になりますが、その理由は第四章で詳しく述べます。

Y氏も中国医学治療により、部分的ですが、明らかな運動能力の改善が認められました。右前腕を肘を中心に九〇度以上曲げられるようになりました。また上半身を左右に振る運動ができるようになり、そのため歩行がスムーズになりました。ところがこの時、体重が治療前よりも四kgほど減っていたのです。Y氏は病院の食事（中国の病院ですから、病院食も中華料理です）が合わず、入院して以来、食事の量がすっかり減ってしまったのです。うっかりしていたとは言え、申し訳ないことをしてしまいました。早速、日本料理の出前をとることにして、一件落着きました。

さて、ここで注目しないといけないのは、Y氏の場合、治療の間に体重が減少しましたが、それでも運動機能が改善した点です。この運動機能の回復は、栄養状態の改善などでは説明できません。やはり、別のメカニズムを考える必要がありますが、今のところ明解な説明ができない、というのがホントのところ です。

なぜ中国医学治療が神経や筋肉の難病に対して効果があるのか、というのはこれからの  
大変重要な研究テーマだと思います。



# 第4章

---

脳はどこに行っただか？

前章では手足が麻痺する難病患者N氏やY氏に対する中国医学の診断と治療について述べました。

N氏は西洋医学による治療を長年受けていましたが、症状は全く改善しませんでした。またY氏も西洋医学による治療を既に受けていましたが、急速に症状が悪化していったのです。

このような二人の患者が中国医学によって初めて良くなったのです。突然歩けるようになったという奇跡的な効果ではありませんが、現代最高の西洋医学でもなし得なかった治療効果と言うことができます。

わたしはお二人の症状が改善したことを心から喜びましたが、同時に、西洋医学が決して万能ではないことを思い知らされたのです。

この患者さんに対する中医の診断には、何億円もするMRIなどの先端医療機器は要しません。もちろん、身体の組織を取り出して検査するバイオプシーも行っていないです。

中医はただ自分の目で診て、身体に触れるだけで診断したのです。また中医の治療も特別な秘薬とか、開発に何百億もかけた新薬のようなものも使用していません。

天然に生えている薬草だけで治療したのです。

なぜこのような簡単な診断と治療だけで、西洋医学よりも優れた治療効果が得られるのか、わたしは不思議でたまりませんでした。

N氏の症例に出会ってから、わたしの中国医学に対する興味は急に深まっていきました。中医はいつたいたいどのようにN氏やY氏の病気を考えて治療しているのか、西洋医学とどのように違うのか、医者として興味を覚えたのです。

## 中国医学と西洋医学の差異

中国医学と西洋医学の違いというと、まず思い浮かぶのは、薬の違いではないでしょうか。

西洋医学では合成された西洋薬を使用し、中国医学では天然の生薬などの漢方薬を用いて病気を治療します。この薬の差異が西洋医学と中国医学を区別しているという考え方が、

確かに日本で漢方治療と言うと、漢方薬—エキス剤が大部分ですが—を処方することで、最近増えてきた東洋医学専門外来あるいは漢方薬局では、生薬を処方するところもあ

ります。もし薬の違いが医学の差異になるのであれば、エキス剤ではなく生薬を使用する方がより本格的な漢方医学ということになるでしょう。わたしも長い間そのように思っていました。

しかし、中医は漢方薬イコール漢方治療と考えてはいないようです。これは教科書に記載されていた訳ではなく、同僚の中医から聞いた話なのですが、なかなか本質をついた学説のように思ったのでご紹介しましょう。

彼は次のような話をしてくれました。

「薬は使用する医師の医学的な考え方によって、漢方薬にも西洋薬にもなるのです。ですから西洋薬でも使い方によれば漢方薬になります。」

そして、一つの例を教えてくださいました。

「清朝時代に張錫純という中医が石膏阿斯匹林湯という風邪薬を開発しました。彼は中国医学の理論に従って、西洋薬のアスピリン（中国語で阿斯匹林）と石膏を組み合わせたのです。」

石膏は鉱物ですが、中国医学では清熱作用―解熱作用―があるとされ、風邪の治療に使われてきました。ところが石膏は発汗作用が少なく、これだけではあまり利き目がなかったのです。

張錫純は、中国に輸入された西洋の風邪薬のアスピリンを中国医学の観点から研究し、アスピリンは「発汗有余、清熱不足」（発汗作用は大きい、解熱作用は少ない）ことを見出したのです。そして「清熱有余、発汗不足」（解熱作用は大きい、発汗作用は少ない）石膏とアスピリンを組み合わせ、風邪に良く効く石膏阿司匹林湯を開発したのです。ここで重要な点は、「発汗」も「清熱」も中国医学における治療原則の一つということです。アスピリンも中国医学の治療原則に従って使用すると、西洋薬ではなく漢方薬になってしまうのです。

日本に留学したことのあるこの中医は、現代の日本の漢方についてこう述べています。「日本の先生方も漢方薬を使っていますが、考え方は西洋医学のままです。これでは漢方治療ではなくて、漢方薬を使った西洋医学治療でしょう。」

彼の意見は、薬はあくまで治療の道具であり、使用する医師の考え方によって西洋医学か中国（漢方）医学か決まるというものです。つまり、西洋医学と中国医学の本質的な差異は、それぞれの医学の根底に横たわる基本的な考え方にある、ということでしょう。人体の機能や病気に対する考え方、あるいはもっと広げて、人間を含めた世界・宇宙に対する世界観の違いが中国医学と西洋医学を区別している、と言えるかもしれません。

西洋医学は科学の進歩とともに発展してきました。西洋医学の基礎は科学と言えます。西洋医から科学的知識や分析方法、あるいは科学的技術を取り上げると、患者の診断も治療もできなくなってしまう。

では中国医学の基礎とは何でしょうか？

それは古代中国の自然哲学である陰陽五行学説なのです。科学がこれほど発展した現代であっても、中医は数千年前の陰陽五行学説を基にして、臓器機能や病気のメカニズムを考えて患者を診断し治療しているのです。

現代の中医は西洋医学にも精通し、最先端の医療機器を用いて診断することもありますが、それは補助的に西洋医学的な診断治療を行うためなのです。彼らが中国医学の観点から患者を診断し治療するときは、やはり陰陽五行学説をもとにして考えるのです。

このように現代中国医学の中にも陰陽五行学説は脈々と生き続けています

本章ではN氏やY氏のように手足が麻痺する病気を中国医学はどのように考えるのか、お話ししたいと思います。西洋医学では手足の運動を統括しているのは脳です。脳をキーワードに中国医学の臓器に対する考え方や、陰陽五行学説との関係を見ていきましょう。

N氏やY氏に対する中国医学の診断名に、脳とは関係のない臓器—脾、肝、腎—の名前

が入っており不思議に思われたかもしれませんが、本章を読み進めるうちにお分かりいただけるでしょう。

## 中国医学における臓器に対する考え方

まず中国医学における臓器とはどのようなものか、その基本的な考え方についてお話しましょう。

臓器はわたしたちの生命を維持していく上で、最も重要な器官です。ほとんどの病気は臓器の障害から生じると言っても良いでしょう。古代の中医が臓器の機能をどのように理解していたのか、また西洋医学とどのように異なるのか、これらの点について考えてみます。

西洋医学における臓器は解剖学を基礎にしております。先人達は人体―死体―の解剖を行って個々の臓器を目で確かめ、どれが心臓で、どれが肝臓か、というように臓器を分類していきました。次にミクロのレベルで組織を調べたり、生理学や生化学などの研究を行いつつ、次第に臓器の機能を明らかにし、そしてその機能がどのように障害されたら病気になるのか考えてきたわけです。

一方の中国医学ですが、西洋医学とは全く異なったアプローチで臓器を理解しているようです。

古代の中医は人体解剖を行う前に、臓器の機能を頭の中で考えていたように思います。つまりいくつかの臓器—後の五臓六腑になります—を想定し、それぞれの臓器の機能をまず考えていったわけです。中医は適当に想像したわけではなく、病気になった時の身体の変化や病気の経過、そしてどのような治療—薬草—によって良くなるのか、これらをつぶさに観察しながら臓器の機能を少しずつ考えていったのでしよう。

このように臓器の機能と病気の関係を明らかにしていった方法は、西洋医学と中国医学では随分と異なるように思います。西洋医学は演繹的な方法で、中国医学は帰納的な方法と言えるかもしれません。

古代の中医は人体解剖も行ったようですが、西洋医よりも解剖を重視しなかったのではないかと思います。

中医は自分達の考えた臓器がどれに相当するのか、解剖をしながらつき合わせていきましたが、どうしても見つからないモノがありました。

その代表は経絡けいらくです。中国では現在も経絡の存在を証明しようとする研究がありますが、



いまだに見つかっておりません。

もう一つは三焦さんしやうという臓器です。五臓六腑の中の一つの臓器とされていますが、それに相当する臓器は解剖学的に存在しないのです。架空の臓器と言えるものです。

古代の中医がもし解剖を重視しておりましたら、自分達の考えた臓器の存在や機能を見直したはずですが、彼らはそうはしませんでした。このため中国医学の臓器は西洋医学のそれと似て非なるもの、いや全く別物になってしまったのです。

たとえば脾臓を見ましましょう。西洋医学では血液や免疫系と関係する臓器とされています。ところが中国医学では食べ物の消化吸収に関係する臓器とされているのです。おまけに訳の分からない気を生み出す機能もあるというのです。

しかし別の角度から考えてみますと、中国医学が解剖を重視しなかったからこそ、ユニークな概念や治療法が生まれたと言えるのではないのでしょうか。

たとえば鍼灸です。鍼灸は西洋医学にはない治療法ですが、目に見えない気や経絡きんらくという概念をもとにして発達したものです。また難病のN氏やY氏は、中国医学の実体の見えない臓器をもとにして診断治療され、初めて症状が改善したのです。

また後ほど述べますが、中国医学の臓器や人体に対する考え方は、最近の物理学の考え

方に酷似しているのです。古代の中医は人体を「複雑系」として考えたように思います。中国医学の臓器に対する考え方が西洋医学と異なることから「中国医学は非科学的な医学である」と思われるかもしれませんが、決してそうではないのです。中国医学は近代西洋医学がいまだに取り入れていない先進的な生命観に通じた医学だとも言えるのです。このことを念頭において、次項以下を読み進めていただければと思います。

## 消えてしまった脳

ある高名な日本の解剖学者が「五臓六腑は間違いで、三髄、五臓六腑が正しい」と言われたことがあります。

脳髄、脊髓、骨髄を三髄として、これらを入れないと人間は機能しないとおっしゃるのです。半分冗談でしたが、もつともなご説であると感心した憶えがあります。

なぜなら五臓六腑には、脳や脊髓の中樞神経は含まれていないからです。

五臓六腑はわたしたちも良く使う言葉ですが、もともと中国医学の解剖用語なのです。五臓とは心、肝、脾、肺、腎の五つの臓器を指しています。そして六腑とは胆(胆囊)、

胃、小腸、大腸、膀胱の五つの臓器に加えて、もう一つ三焦という聞き慣れない名前の臓器が入り、合計六つの臓器になります。

三焦は水の代謝に関係すると考えられていますが、解剖学的に存在している訳ではなく、架空の臓器と言えるものです。もちろん、この三焦が脳と言うわけではありません。

中国医学では五臓六腑の働きにより人間は機能し、また五臓六腑の異常によって病気が発生すると考えるのです。このように人体機能の要になっている五臓六腑の中に、脳や脊髄が入っていないのはおかしい、と先の解剖学者がおっしゃったわけですね。

中医は脳のない五臓六腑からどのようにして、脳の病気を診断し治療しているのでしょうか？

まず最初に、脳や脊髄の中樞神経はいつたどこに行ってしまったのか、中国医学の歴史を遡りながら、脳の行方を探ってみましょう。

実は脳が解剖学的に存在することは、かなり古くから知られていたのです。中国医学の最古の教科書にあたる「黄帝内経」の中に脳の記述が既に認められるのです。

黄帝内経では五臓を分類していますが、さらにその他に奇恒の腑という一群の臓器を分類していました。この奇恒の腑の中に脳が含まれているのです。

奇恒の腑は六つあり、髓・骨髄、骨・脈、血管、胆・胆嚢、女子胞・子宮、の五つの臓

器の他に脳が入っています。解剖学者が指摘した三髄は、なにも見過ごされていたわけはなかったのです。

ところがこの当時、脳の機能は明らかではありませんでした。内経では、精神活動は心にあるとされていたのです。そして奇恒の腑という分類も、内経の後には使われなくなりました。

しかしこれは致し方のないことです。わたしたち西洋医も十九世紀後半まで脳の機能はおぼろげにしか分からなかったのです。そして脳科学が注目されている現在でも、脳の機能は理解されていないことの方がずっと多いのです。

古代の中医が頭の骨を開けて脳を確認しただけでも、医学的には大きな業績だと思いません。

さて、中国で脳の機能が明らかになってきたのはずっと後年の事になります。

十七世紀の後半に「本草備要」（一六九四年）が刊行されましたが、この中で脳の機能が述べられているのです。「人の記性、皆脳中にあり」と記載されていますが、これは脳と記憶力（記性）の関係を示しています。

そして十九世紀に入りますと、脳の機能がさらに明らかになってきました。「医林改錯」

(二八三〇年刊行)には、「両耳は脳に通じ、聞く所の声を脳に帰す。鼻は脳に通じ、香臭は聞き脳に帰す」と記載されており、脳と聴覚や嗅覚との関係がかなり明確になってきました。そして「霊機記性、心にはなく脳にあり」と、精神機能や記憶機能は心ではなく脳にあるとしており、近代的な脳概念に近づいてきたのです。

### 五臓に分散する脳の機能

現代の中医は脳をどのように考えているのでしょうか？

最近の中国では、脳に関する研究は日本や欧米と変わらないぐらい盛んに行われています。北京市の西北にある名門清華大学では、政府から巨額の資金援助を受けて脳の研究を行っています。わたしの勤めていた中日友好病院も清華大学と協力して、パーキンソン病などに対する脳移植の研究を続けているのです。

中医も例外ではありません。脳に関する研究を盛んに行っています。また中国医学専門の外來や病棟を見回しますと、脳の病気を患った患者さんが実に多いことに気がつきます。このように現代の中医にとつて脳は決して無縁の臓器ではありません。特に西洋医学を勉強している若手の中医は、わたしたち西洋医と同じように脳の解剖や機能に精通してい

るのです。

では中医はどのように脳の病気を治療しているのでしょうか？

これは興味深い問題です。なぜならば現代であっても、いまだに脳は五臓六腑の中に含まれていないからです。中医は数千年前と同じように、この五臓六腑で脳の病気を治療しているのです。

中医が複雑な脳の機能や病気を五臓六腑からどのように理解しているのか、これが本項の主題です。

結論から先に申し上げますと、中国医学では脳の機能は五臓に分配されているのです。つまり脳の機能をいくつかに分けて五臓に振り分け、それぞれの五臓が脳の機能を分担すると考えるのです。

そして脳の病気も五臓の障害によって発生すると考えます。脳のある機能が障害された場合、それを担当している臓器の障害と診断するのです。

このように申し上げますと、想像力の逞しい読者は次のように思われるかもしれません。「脳の機能を分担する五臓は、筋肉や感覚器官と神経のようなもの——おそらく経絡——で結合し、運動機能や感覚機能を司っているのであろう」と。

わたしも最初、中医から話を聞いた時には早とちりしてこのように考えたのです。しか

しこの考え方は、いかにも西洋医学的なものです。中国医学の本質を理解していないと、このような考え方になってしまうのです。

中国医学は西洋医学とは全く異なった発想で五臓から脳を考えています。その発想の根底にあるのは陰陽五行学説なのです。

わたしたち西洋医は神経科学をベースにして脳を考えますが、中医は古代の自然哲学をベースにするわけです。

古代の中医は陰陽五行学説にもとづいたいくつかの概念を導入しながら、巧妙に複雑な脳機能と五臓を結びつけています。そこには古代中国の中医の優れた知恵が読み取れるのです。

### 五行学説で分類される五臓

脳の機能と五臓の関係には、陰陽五行学説がベースになっています。本項では中国医学の基礎になっている陰陽五行学説をご紹介します。五臓とどのように関係するのか述べていきます。

陰陽五行学説は陰陽学説と五行学説の二つの学説から成り立っていますが、脳機能と五

臓を関係づけているのは主に五行学説の方です。

まず、五行学説の基本的な考え方をご紹介しましょう。

五行学説の基本的な考え方の一つは、世界は木、火、土、金、水の五種類の基本物質で構成されているというものです。そしてこの世の全てのもものは木、火、土、金、水の五種類に分類できると言うのです。

この五行の分類は身体にも当てはめられ、五臓もこれらの基本物質に対応して分類されるのです。肝は木、心は火、脾は土、肺は金、腎は水に属するとされています。これを表にすると次のようになります。

【表二】

五行	木
五臓	肝
	心
	脾
	肺
	腎

皆さんはこの五行の分類法をどう思われるでしょうか？

世界が五種類の基本物質で構成されている、という考え方に抵抗を感じる人は多いのではないのでしょうか。現代科学の概念とあまりにもかけ離れた考え方だからです。物質を分



析する器械もない古代人が考えた、いかにも幼稚な理論と思われるでしょう。

陰陽学説でも世界を陰と陽の二つに分類しますが、目に見えない陰と陽という概念で分類しますので、受け入れることもできません。ところが五行学説では木とか火などのようにわたしたちがどのようなものか良く知っているもので分類しますので、大きな抵抗を感じるので。

しかし困ったことに、この五行学説の分類は、五臓だけでなく他の臓器、あるいは脈の種類など人体機能に関する様々なところで行われています。そして脳の機能と五臓の関係もこの五行の分類を基礎にしているのです。

わたしは五行学説の考え方に大いに困惑し、同僚の中医に質問してみました。科学的な常識を持つ現代の中医が、この非科学的な五行学説をどのように理解しているのか、興味深い問題です。

「先生は、ホントに肝臓は木で心臓は火であると信じているのですか？」

「まさか、そんなこと信じていませんよ。」と笑いながら答えてくれました。

「五行学説は昔の人の自然現象に対する考え方です。後になって、中医が強引に当てはめたのでしょう。」

わたしは、なるほどそうなのか、と思つて胸をなで下ろしたのです。なぜなら科学を少しはかじつたものにとつて、「肝臓は木で心臓は火である」という五行学説の考えを受け入れることは、踏み絵を踏むような思いがしていたのです。転び、サイエンティストにならずに済んだのです。

実際、彼の言う「五臓を五行に強引に当てはめた」というのはなかなかの射た表現なのです。その理由については後ほど述べましょう。

## 運動機能はどう説明されるのか

五臓の五行分類がお分かりいただけただけところで、次に手足の麻痺を起こす脳の病気を中国医学ではどのように考えているのか見ていきましょう。

脳の機能の中でも、手足の運動機能は最も重要なものの一つです。手足が麻痺すると日常生活が大きく制限されるからです。

このように手足の麻痺を起こす病気は少なくありません。脳梗塞や脳出血などの脳血管障害、あるいは脊椎の椎間板ヘルニアなど、脳外科医が治療する病気は数多くあります。手足の麻痺が起きない病気の方が少ないくらいです。

さて、五臓で手足の運動機能を考えるには、五体という中国医学の概念を学ぶ必要があります。五体はその数字が示すように五行学説と密接に関係しているのです。

まず、五体という概念を述べましょう。ベストセラーにもなりました「五体不満足」(乙武洋匡著)のあの五体のことですが、もともとは中国医学の解剖学的用語で、単に手足や胴体のことを言うものではありません。

五体とは、脉、筋、筋、筋、皮、骨の五つの器官を指しているのです。

「脉」とは血管のことです。

「筋」「すじ」とは、腱・靭帯・筋膜のことで、後の筋肉と関係しますが別物です。なお爪も筋に含まれます。

「筋肉」は四肢などの筋肉だけではなく、筋肉の周囲にある脂肪も筋に分類されます。身体で最も大きな器官と言えるでしょう。

「皮膚」は汗腺なども含み、身体のプロテクションだけでなく汗による老廃物の排泄を司っています。

「骨」は全身の骨だけでなく、歯も含まれています。

これらの器官は五行学説を基にして五臓と密接に関係しながら機能しているのです。

前項で、五臓は五行学説に従って肝は木、心は火、脾は土、肺は金、腎は水に分類され

ることを述べましたが、五体も同じように分類されます。そして重要なことは、五臓と五体は五行の同じカテゴリーのものが協力して機能しているということです。

表三は五臓と五体の五行学説による分類を比較したものです。

【表三】

五行	木	火	土	金	水
五臓	肝	心	脾	肺	腎
五体	筋	脉	筋肉	皮膚	骨

五体の中で運動機能に密接に関係しているのは筋、筋肉そして骨です。そして五行の同じカテゴリーに分類されている五臓は、それぞれ肝、脾そして腎になります。この三つの臓器で手足の運動機能を説明しようと言う訳です。

ここで中国医学における肝、脾、腎の機能を見ていきましょう。

まず肝ですが、血（液）と関係しています。血液を貯蔵するとともに血液を全身に巡らして各器官に栄養分を送ると考えられています。

次に脾は、食べ物を消化吸収して気や血を造ります。エネルギーを生み出す臓器と言えるでしょう。

腎は、水の代謝の他に成長機能や生殖機能を司っていますが、その他にも脳や脊髄を生ま出す力があると考えられています。

そして、この三つの臓器は五行で対応する五体に対して次のように機能しています。

肝⇨筋に血（栄養分）を送る

脾⇨筋肉に気（活動エネルギー）を補給

腎⇨骨を成長させ、脳や脊髄を生み出す

このように中国医学の肝、脾、腎というものは、運動機能に関与する器官—五体—の栄養状態や活動エネルギーを調節するものなのです。またこれらの臓器と器官を結んでいるのは、気や血という中国医学独特の概念です（第六章参照）。

中国医学の運動機能に対する考え方は、わたしたちが知っている脳や筋肉の機能と随分隔たりがありますが、これも二十世紀に入ってようやく明らかになったものです。古代の中医が栄養状態や活動エネルギーという曖昧な概念でしか説明できなかったのも致し方なかったように思います。

## 五臓の障害で起きる手足の麻痺

ここまでお話してきましたのは、中国医学の正常の運動機能に対する考え方です。言わば運動機能の生理学のようなものです。正常機能に対する考え方は曖昧で不十分なように思いますが、こと病気の治療になりますと俄然、効果を發揮するようになるのです。

本項では、中国医学では手足の麻痺を起こす病気をどのように考え、そして治療するか述べましょう。

中国医学では、手足の麻痺は肝、脾、腎が障害され、五体の栄養状態や活動エネルギーが低下することによって発生すると考えます。

では肝、脾、腎の障害とはいったいどのような障害なのでしょうか？

西洋医学では臓器障害の原因は数多くあります。癌などの腫瘍や血流障害、あるいは自己免疫疾患など様々です。

ところが中国医学では、臓器障害の原因は氣血陰陽のバランス障害だけなのです。

ここで難病患者のN氏の症例を思い起こして下さい。N氏の中国医学の診断は「脾氣虚」と「肝腎陰虚」でした。

「脾気虚」とは脾の気が不足しており、「肝腎陰虚」とは肝と腎の陰が不足しているという意味です。これらは気血陰陽のバランス障害のパターンを示しているのです。(気血陰陽のバランス障害については第六章で詳述します。)

陰と陽は一對となつてバランスを保っていますが、また気と血も同じようになつてバランスを保っているのです。ですから片方—たとえば気や陰—が不足しますと、その臓器の気血陰陽のバランスを失つてしまふのです。

このように臓器障害の原因となつているメカニズムを考えることが中国医学の診断、つまり弁証です。特に臓器の異常に焦点をあてて診断するものを臓器弁証と呼び、最も重要な弁証とされています。

そして治療とは気血陰陽のバランス障害をもとの状態に戻すことなのです。中国医学の診断治療は、西洋医学と比較しますと実にシンプルな考え方にもとづいているのです。

さて中国医学では、脾・肝・腎の障害と診断される手足の麻痺は、ほとんどが西洋医学で言う慢性疾患なのです。N氏やY氏のような筋肉や神経の変性疾患、あるいは脳腫瘍なども慢性の病気に入ります。

慢性疾患の患者さんは徐々に麻痺が進行し筋肉が萎縮してきますので、古代の中医が筋

肉の栄養障害と考へたとしても不思議ではないと思ひます。

興味深いことに、脳卒中の慢性期の患者さんも、同じように脾・肝・腎の障害と診断されるのです。

脳卒中の患者さんは慢性期に入りますと、麻痺を起している筋肉が萎縮してきます。先ほどの変性疾患とは原因——西洋医学的——は異なりませんが、外見上は似ているのです。（脳卒中の急性期については第八章を参照。）

このように西洋医学では別の病氣であつても、中国医学では同じ診断——弁証——になることがあります。西洋医学と中国医学の人体や病氣に対する見方が異なるからです。そして同じ診断のもとでは、治療も同じ内容になってしまうのです。

つまり中医は原因不明の脳の難病でも脳卒中の慢性期でも、弁証が一致すれば同じ治療を行うのです。

このことは難病に対する治療を考える上で、大きな意味を持っています。なぜならば、中国医学ではどんな難病でも治療できることになるからです。

西洋医学では治療できない難病——たとえばN氏やY氏——であつても、中国医学では五臓の氣血陰陽のバランス障害として治療を行えるのです。

このような治療が全ての難病に効果があるとは言へませんが、少なくともギブアップせ



ず、治療を続けられます。これは患者さんにとっても、また治療する医者にとっても大切なことのように思うのです。

中国医学の診断治療は、西洋医学と比べてみますと実にシンプルなお考え方にもとづいています。しかしシンプルであるが故に、西洋医学にはないメリットが生まれてくるのです。

### いかにして五行学説を医学に応用したのか？

最後に、これまでご紹介してきた中国医学の脳機能に対する考え方はどのようにして生み出されたのか考えてみたいと思います。古代の中医が何を見て、どのように解釈していたのか、大胆に推理してみます。

まず、五行学説をどのように医学に応用したのか考えてみましょう。五行学説はそもそも自然哲学ですが、これをどのようにして人間に適応したのかということです。

古代の中医は五行学説によって五臓と五体を関連づけました(表三)。五行の基本物質は木、火、土、金、水ですが、五臓や五体の各々の性格により五行に分類したとされています。

まず五臓の五行の分類がわたしたちに納得できるものか見てみましょう。

心は良く動きますので火に属し、腎は尿を生成しますので水に属する、というのはわたしたちにも理解できます。しかし他の臓器はどうでしょうか？ 納得できないものがほとんどです。

たとえば、肺はなぜ金なのでしょうか？

中国医学の教科書の説明を見てみましょう。

「金は肅殺（万物を引き締めて、厳しく物を痛めつける）の性質がある。肺は肅降（引き締まり降りる）の働きがあるので金に属する」（「基礎中医学」谷口書店刊より抜粋）

これを読んで納得できる現代人はいないでしょう。このように身体の臓器や器官に対する五行の分類にはこじつけしていると、多々あるのです。

ところが五臓と五体の関係に目を移しますと、うまくつながっています。手足の運動を考へる時に、肝と筋、脾と筋肉、腎と骨が関係しますが、五臓と五体の各々の機能がうまく協調して機能しているのです。

もし最初に五臓と五体を別々に五行に分類したとすれば、あまりにもうまく当てはまり過ぎていと思われませんか？

たとえば筋が火に、脈が木に属すとしみますと、心と筋、肝と脈が関係し合うことになります。これでは運動麻痺をうまく説明できなくなってしまう。

わたしは五臓と五体の五行分類は、まず五臓と五体の関連づけを行い、その後で五行に分類していったように思います。五臓と五体を別々に五行に分類したとすると、偶然が重なり過ぎるからです。

五行学説を学ぶ時に、「なぜこれが木で、あれが金に属すのか？」と不思議さを通り越して頭にくる人―わたしのようにもおられるかもしれないが、それぞれの臓器や器官の関係を先に決めて、その後で五行に分類したと考えれば、五行学説の分類も受け入れやすくなります。

わたしが中国医学を学びはじめた時に、五行の分類法に抵抗を感じて同僚の中医に尋ねた時の、

「あれは古代の中医が五行学説に強引に当てはめたのですよ。」  
という答えは、実を射ているように思っています。

現代人にとって古代の五行学説をベースとした中国医学の臓器に対する考え方はなかなか分かり難いものですが、このように見てまいりますと、少しは理解しやすいのではないのでしょうか。わたしは、古代の中医がどのように患者さんを診ていたのか思いを巡らすうちに、彼らの洞察力に感銘を受けるとともに、医師として親しみさえ覚えるようになった

のです。

## カオス理論から見た五行学説

次に五行学説をベースとした臓器に対する考え方には極めて先進的なアイデアが秘められていることをご説明しましょう。

わたしは当初、五行学説の非科学的な側面——五種類の基本物質など——にとらわれて、人体に対する考え方も単に解剖学的知識が乏しかったためであろう、と思っていました。しかし最新の物理学の生体モデルと大きな共通点があることに気がついたのです。

そのきっかけとなったのが前の中医の話でした。彼の話は「五行学説の最も大事な点は、木、火、土、金、水の間の関係なのですよ」と続いたのです。

その関係には生・我・我・生、剋・我、我・剋があります。

これらの関係は、相生と相克の二つの基本的作用から成立っています。相生とは、対象を生かすこと、つまり促進作用を示しています。逆に、相克とは対象を克すること、つまり抑制作用を示しているのです。これらの作用の対象が、自分なのか他者なのかによって四つに分けることができます。

次にまとめてみましょう。

生我⇨他者から自分への促進作用

我生⇨自分から他者への促進作用

剋我⇨他者から自分への抑制作用

我剋⇨自分から他者への抑制作用

これをもとに、木・火・土・金・水に分類された五臓がお互いにどのように影響し合っているのか図示してみました(図五A)。このようにまとめますと、臓器の間に働く相互作用がまるで力学的法則のように論理的に規定されていることが分ります。

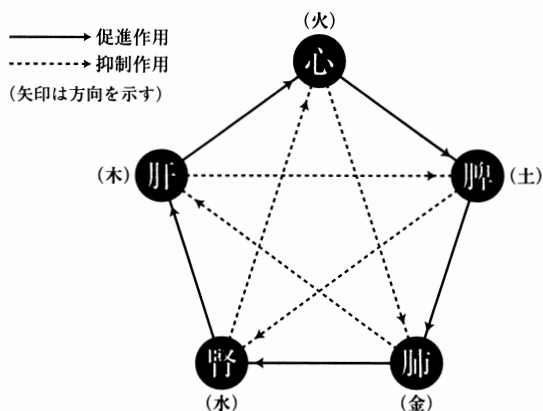
この図を眺めながら、わたしは漠然と五行学説の考え方は、数学的なモデルで表現できるのではないかと考えていました。ちょうどその頃、北京で開催された生体工学の国際学会である日本人物理学者と知り合いになり、そのことを相談したのです。

図五Aのような絵を書いて説明したところ、

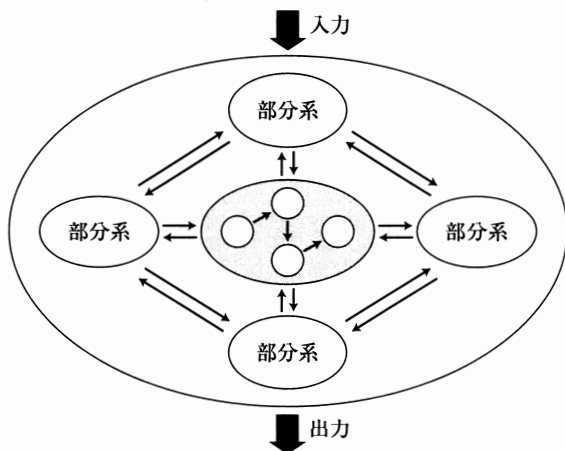
「これはカオス理論の生体モデルに似てますね」との返事が返ってきたのです。そして帰国した彼から送られてきた論文を見てわたしは愕然としました。

図五〇五行学説とカオス理論——生体(人体)に対する考え方の比較

A. 五行学説の人体機能に対する考え方



B. カオス理論による生物モデル



資料(B)：郷原一寿「ダイナミカルシステムとしての生物」日本ME学会会誌、10(4)、pp.3-10、1996.

カオス理論の生体モデルを説明した図は、五行学説の臓器の図にそっくりだったのです。

カオス理論は一九七〇年代後半より急速に発展してきた力学理論で、フラクタル理論と同じように複雑系を解析する新しい理論です。「カオス」とは「混沌」の意味ですが、世界中でブームになり一般書も数多く出版されていますのでご存じの方も多いと思います。

カオス理論が注目された理由は、予測不可能な複雑な現象—気象変化や乱流など—の中には簡単な方程式で記述できるものがあることが分かったからです。平たく言いますと、一見して複雑な振る舞いも、実は単純なルールで成り立っているものがあるということです。

そして最近ではカオス理論を用いて生物全体の機能を数学モデルとして表現する試みがあるのです。つまり複雑な生物の機能を単純なルール—方程式—で表そうとするわけです。このカオス理論による生物モデルが五行学説の人体に対する考え方と良く似ているのです。

図五Bにカオス理論による生物モデルを示しましょう。

このモデルでは、生体を部分系から構成される一つのシステムとして考えます。そして外界からの入力、各々の部分系において処理され、関連する別の部分系に伝達され、相

互に影響を及ぼし合いながら最終的に出力されると考えるのです。

この図五Bの部分系を五臓―肝、心、脾、肺、腎―に置き換えて、図五Aの五行学説の人体機能と見比べて下さい。酷似していることがお分かりいただけだと思います。カオス理論では部分系が、五行学説では五臓という部分が、相互に影響し合って全体の機能を司っているのです。

カオス理論による生物モデルで重要な点は、部分系は単純な決定論的方程式で表わすことができ、そのパラメータを変化させるだけで周期的変化や予測不可能な不規則な変化―カオス―が出力されることです。

要するに、部分系を決めているルールの一部を少し変化させるだけで、出力は様々な変化をするということです。

カオス理論による生物モデルから見ますと、中国医学の診断―弁証―とは、外部出力の変化からパラメータの変化を類推する作業ではないでしょうか。つまり、五臓の機能が数式的パラメータで規定されるとすれば、五臓の機能異常とは正常域を逸脱したパラメータの変化であり、それによる外部出力は患者の症状―証―と考えられるのです。この外部出力から部分系のパラメータの変化を解析することは、弁証という作業に良く似ているよう



に思うのです。

このように考えると、西洋医学の診断とは、部分系を取り出して直接その中身を調べるようなものではないでしょうか。

話が堅くなつてしまいました。この項で申し上げたいのは、五行学説の人体に対する考え方の先進性です。古代の中医は五行学説を応用して、人体を一つの複雑系システムとして考えたようです。これはわたしたち西洋医がいまだに取り入れていない最新の考え方なのです。

